

とみらいテラス雑感 vol.5

好きな戦国武将

前回と前々回で、私の「こだわり」の一端について触れましたが、私の読書歴から見えてきたことに戻ってみたいと思います。

リストを作成していると、ある時期に日本の戦国時代を題材にした多くの歴史小説を読み漁っていた時期があったことが見えてきました。まあ、歴史好きな人にとっては、自分の好きな戦国武将のひとりくらいはいるとは思いますが、徳川家康、豊臣秀吉、織田信長あたりが有名どころなんではなかろうか。

最近の日本史では、主にこの3名の事績を学べば良いという風になったとかニュース記事で読んだ記憶があるのですが、本当なのでしょうか？

私は、新田次郎先生の「武田信玄」（全4巻）を読んで以降、「いち推し」の戦国武将は「信玄さま」なんですけど、海音寺潮五郎先生の「天と地と」では上杉謙信が主人公でもあり、「信玄さま」は敵として描かれていて、作家や主人公が異なれば、当然「いち推し」の描かれ方も変わってしまいます。

歴史小説ですから、歴史的に正しいかどうかよりも、読みやすく楽しければ満足するので、「いち推し」の描かれ方で一喜一憂はしませんよね。当然フィクションである前提で読んでいることでもあります。先生方も何かしらの「史料」に基づいて、物語を紡いでいることから、全てを否定する気持ちもありません。敢えて言うなら「こんな風に見えるのか。」とか「そういう解釈もあるんですね。」といった感覚で読ませていただいております。

これは、歴史的な見方としても実は重要だと思っていて、特定の「史料」だけでは語れない、語ってはいけないのだと思っています。

複数の「史料」からみても、同じ結論に達するのであれば、その信憑性はより高くなるはずですし、例え異なった見え方をするのであれば、何かその要因があるので、それが見えた時に「歴史は面白く」なるんだと感じています。

あるひとつの考えに囚われ過ぎると視野は狭くなり、本質を見失いがちになりやすいのは、他の人生経験からも感じている部分ですし、これを「拗らせ」た人は、少なくとも私には滑稽に見えたりするんですよ。

いずれにしてもより多くの知識を幅広く吸収することは、決して無駄ではないはずですし、それを得る方法としての読書は、人生をも豊かにしてくれたんだと感じています。

とみらいテラス雑感 vol.6

勝てば官軍、負ければ賊軍

前回「好きな戦国武将」ということで、これを題材にした作品について語りましたが、戦国時代と並んで人気なのは幕末から明治維新の時期であることは周知の事実でしょう。

西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、坂本龍馬に近藤勇など、有名どころも沢山登場することから、作品の題材にも事欠かない時代とも言えます。

これは戦国時代と同様で、誰の視点で見るかによって、描かれ方も異なる訳ですが、凡その共通項として、薩長土肥の新政府軍が「官軍」、徳川幕府軍が「賊軍」という点になります。そこに反発するつもりはありませんが、戊辰戦争と呼ばれる内戦で多大な犠牲を払った会津藩は、何故ゆえにその様なことになったのか釈然としないこともありました。

それを一種の解決に導いてくれたのが、早乙女貢先生の「会津土魂」でした。京都守護職の職務を全身全霊でもって全うした松平容保と会津藩士、そこに京都の治安維持のために用いた新撰組も相まって、尊王攘夷派の過激分子を取り締まったことが、仇になったということなのでしょう。

ここでひとつ疑問が生じました。徳川幕府が「開国」したことの反発し「尊王攘夷」を掲げていた人達が、「攘夷」を捨てたにも関わらず、幕府の「開国」を認めなかったのは何故なのかという点が、しっくりときていません。

最近では、当時の覇権国家であるイギリスと、それと反目するフランスの代理戦争的な解釈をされている方もいて、日本史でありながらグローバルな視点が必要になってきていることも痛感しております。

また、新政府軍の会津攻略の巻き添えとも言える長岡藩の家老河合継之助を主役とした作品もあり、英雄的な人物だけに焦点が当てられた歴史ではなく、より多くの視点でひとつの事象を見られる環境があることに、今更ながらですが、「日本」という国やこの国の社会、そしてそこに住む人々が、寛容であり、柔軟性に富んでいるのだと感じております。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」は、事象としての真理ではあるとは思いますが、それが全てではないということもまた、認識しておかなければならないと思っています。

何に勝って、何に負けたのか、「試合に勝って、勝負に負ける」口惜しさや何とも言えない虚しさを知り、例え負けたとしても、それを評価してくれる人が、必ずいることに感謝したいと思っております。